

2007年11月15日発行

江戸遺跡研究会会報

No. 111

江戸遺跡研究会

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

◎例会時間変更しました。第113回例会は下記の通り行います。◎

第113回例会のご案内

日 時：2007年11月21日（水）19：00～

内 容：石井 龍太氏（東京大学 大学院）
「溶姫御殿の幕末近世瓦 ー瓦文化と近世アジア世界ー」

会 場：江戸東京博物館 学習室2

交 通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分
都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室
03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第112回例会は、2007年9月19日（水）午後18時30分より東京文化会館中会議室◇
◇にて行われ、中野 高久氏より以下の内容が報告されました。 ◇

文京区千駄木三丁目南遺跡の調査概要 ～植木屋森田六三郎家の様相～

中野 高久

(共和開発株式会社 調査部)

1. はじめに

発掘調査は、学校法人東洋大学の外国人宿舎建設に伴う事前調査として実施された。試掘調査は、文京区教育委員会が平成16(2004)年12月～平成17(2005)年2月にかけて断続的に実施された。試掘調査の結果、旧石器時代の遺物、縄文時代、弥生時代、近世期の遺構・遺物が検出、出土し、埋蔵文化財の保存状況が良好であることが確認された。

試掘調査の結果をふまえ、平成18(2006)年8月に学校法人東洋大学・文京区教育委員会・共和開発株式会社の三者による協定書が締結され、共和開発株式会社が発掘調査を実施した。

発掘調査は、平成18(2006)年9月4日～同年12月4日にかけて行われ、調査面積は590㎡である。整理調査は、同年12月5日～平成19(2007)年3月25日にかけて行われた。

2. 遺跡の位置と地形

本調査地点は、文京区千駄木三丁目2番地に所在し、東京メトロ千代田線千駄木駅の西側、団子坂を上った場所に位置している(第1図)。地形的には武蔵野台地の本郷台東縁部に立地し、台地平坦面から南東斜面に移行する部分に位置している。現地表面の標高は、約20m前後を測る。

近隣遺跡には本調査地点から南西へ約200m～約350mにかけて千駄木貝塚(区No.25遺跡)、千駄木遺跡(区No.100遺跡)などが同一台地上に位置している(第2図)。

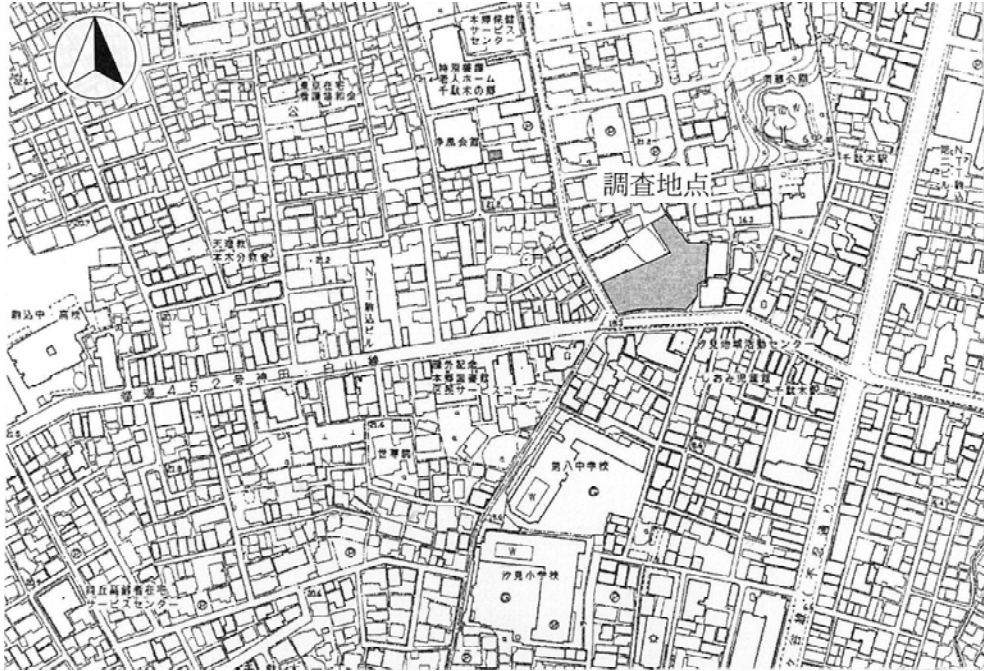
3. 歴史的環境

今回の調査は、文京区千駄木三丁目南遺跡(区No.97遺跡)の第2地点(区No.108遺跡)にあたり、(仮称)第1地点については平成17(2005)年に文京区・文京区教育委員会・共和開発株式会社『千駄木三丁目南遺跡』として報告されている。

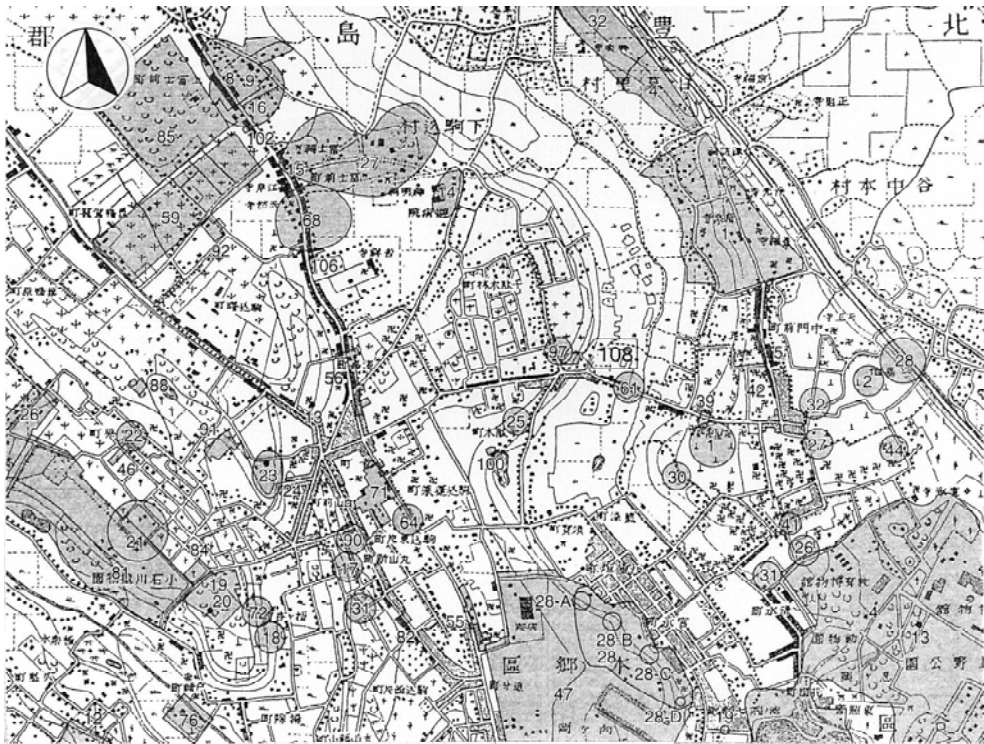
本遺跡はいわゆる「複合遺跡」で旧石器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代、近世以降の遺構、遺物が確認されている。

旧石器時代では東西約2.0m×南北約3.0mの規模で礫群が立川ロームⅢ層下位からⅣ層上面にかけて確認され、細粒凝灰岩製ナイフ形石器、石核、黒色頁岩の使用痕のある剥片などが出土した。

縄文時代では中期前半と中期後半の竪穴住居跡、早期前半の陥穴が検出された。遺物では黒色頁岩・チャート・黒耀石の石鏃、黒耀石のスクレイパー、砂岩・黒色頁岩・玄武岩の打製石斧、閃緑岩の磨石、早期～後期の土器、土器片錘、土製円盤などが確認され、人面装飾付土器が特筆される。人面装飾付土器は文京区内では初見である。



第1図 本調査位置図 (S=1/5,000)



第2図 遺跡の地形と周辺遺跡 (明治13(1880年))

弥生時代では中期後半の環濠や堅穴住居跡が検出された。遺物では堅穴住居跡から沈線による絵画が描かれた壺の胴部片が出土している。

平安時代では9世紀半ばの堅穴住居跡、9世紀中頃の土坑、10世紀半ばの鍛冶関連遺構(鉄器製造に関連した鍛冶炉を伴う住居跡か)、10世紀代の溝状遺構などが検出された。遺物では9世紀中頃の土坑から墨書「玉」銘、刻書「中」銘の土師器坏、刻書「+」銘の須恵器坏、10世紀半ばの鍛冶関連遺構から墨書「上」銘の土師質皿や墨書(判読不明)の須恵器坏などが出土している。

近世期の本調査地点は、延宝年間(1673年～1681年)には「根津権現」境内の一部と豊島郡「下駒込村」に位置している(第3図、「延宝年中之形 御府内場末往還其外沿革図書 二十四」)。

根津権現は、宝暦2(1705)年まで鎮座し(第4図、「元禄初頃之形 御府内場末往還其外沿革図書 二十四」)、翌、宝暦3(1706)年に現在の所在地(文京区根津一丁目28番地)に遷座している。

遷座後の根津権現境内は「昌泉院領根津権現旧地」(第5図、「延享二丑年頃之形 御府内場末往還其外沿革図書 二十四」)、「元根津」、下駒込村は「麟祥院領」となった(第6図、「江戸総絵図 廿四 駒込千駄木根津谷中まで 廿四 宝暦江戸切絵図」)。

麟祥院領は寛政年間(1789年～1801年)には「麟祥院領浅野佐渡守抱」(第7図、「寛政年中江戸切絵図 卅九枚ノ内 駒込千駄木根津谷中池之端之図井 ノ 廿四」)となり、安政3(1856)年には「下駒込村」(第10図、「御府内場末其外往還沿革図書 二十四」)となっている。

根津権現旧地には、根津権現社の境内社「駒込稻荷」が建立された(第8図、『江戸名所図絵』巻5「根津権現旧地」)。境内には社殿、一對の石灯籠、鳥居などが描かれ、「根津権現旧地」の題簽の右脇には3基の石造物がみられる(第9図、『江戸名所図絵』巻5「駒込いなり」)。

石灯籠は延宝3(1675)年に立てられたものと考えられ、現在は根津神社に所在している寛永9(1632)年銘の庚申塔も建立されていたようである(「根津権現社蹟 新編武蔵風土記稿」)。

その後、明治20年代には「駒込林町」に編入され、宅地化が進み(第11図)、昭和12(1937)年には路面電車が通っている(第12図)。

4. 検出遺構

近世期以降に該当する遺構は、土坑、瓦溜、地下室、溝、建物跡、埋甕、灯火具埋納遺構、胞衣埋納遺構、ピットなどが検出された(第14図)。

以下、主な検出遺構についてみていきたい。

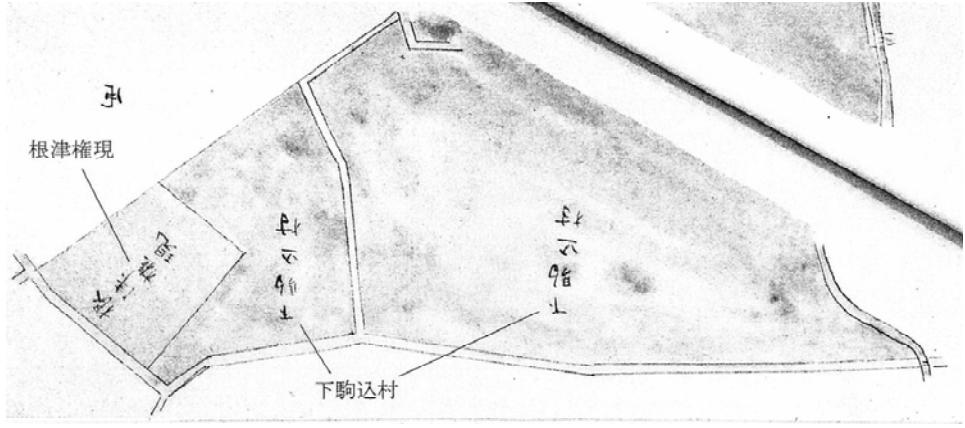
【土坑】

1号遺構はD3グリッドから検出された。規模は長軸5.20m、短軸3.30m、確認面からの深さは1.10mを測る。覆土は灰褐色土を主体とし、炭化物や焼土がみられることから火災を契機とした廃棄土坑と考えられる。推定廃絶年代はコバルト顔料が確認されているが、型紙摺絵がみられないことから明治初頭頃と推測されている。

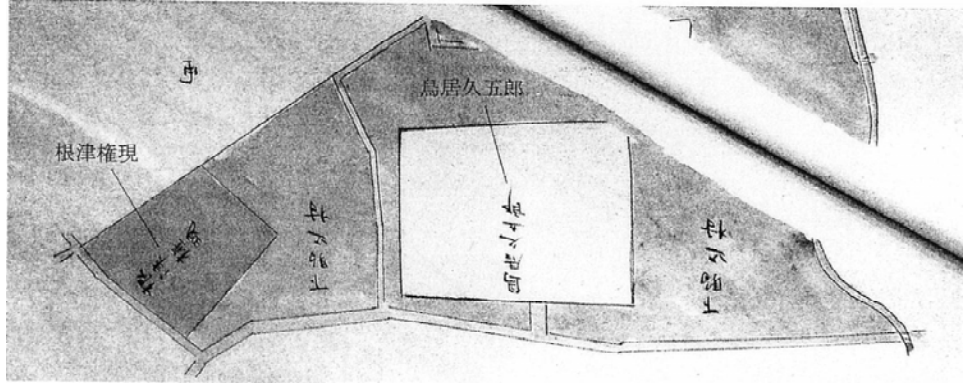
【瓦溜】

161号遺構はE5グリッドから検出された。規模は長軸0.70m、短軸0.50m、確認面からの深さは0.20mを測る。瓦は棧瓦が大半を占め、鬼瓦も確認されている。推定廃絶年代は19世紀後葉以降と推測されている。

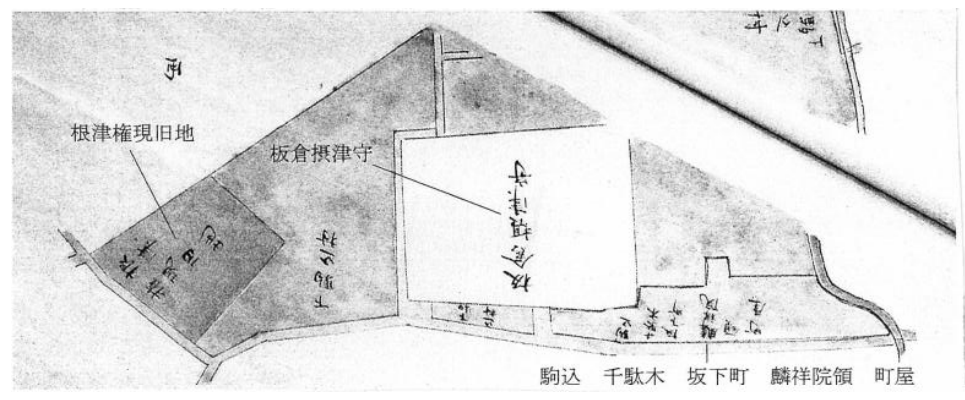
【溝】



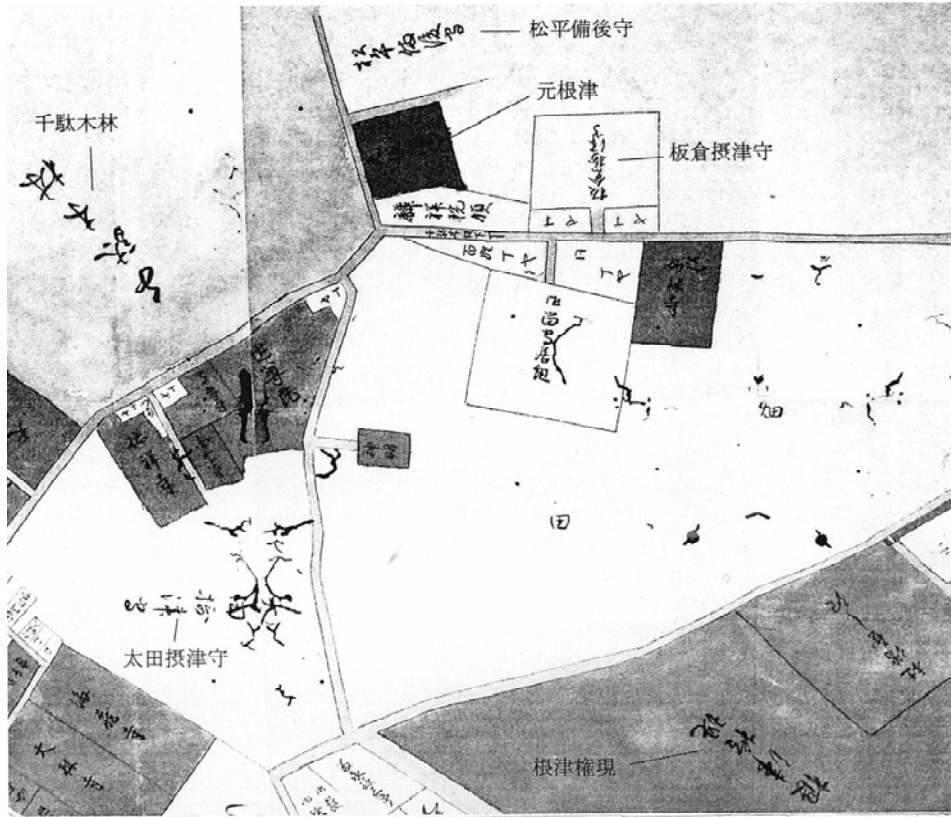
第3図 延宝年間(1673-1681)



第4図 元禄年間(1688-1704)初頃



第5図 延享二(1745)年頃



第6図 宝暦(1751-1764)江戸切絵図



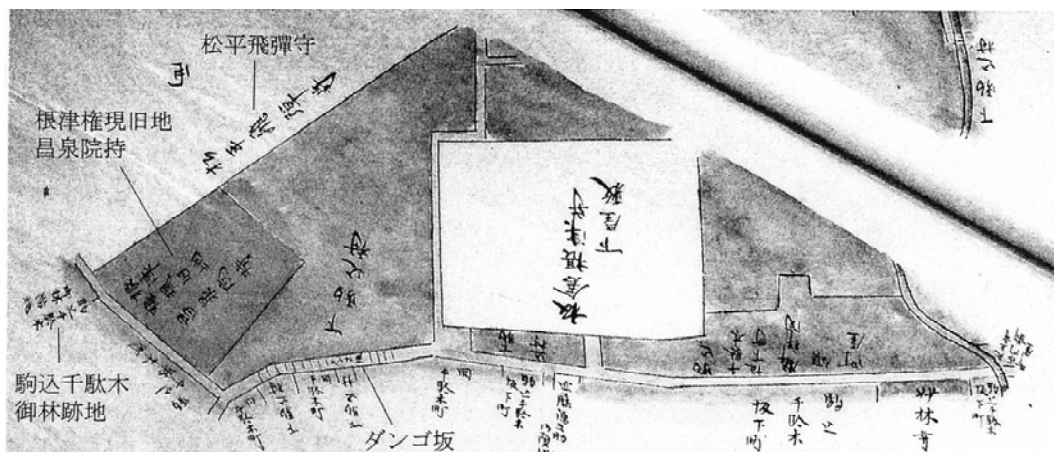
第7図 寛政(1789-1801)江戸切絵図



第8図 『江戸名所図会』「根津権現旧知」



第9図 『江戸名所図会』「駒込いなり」

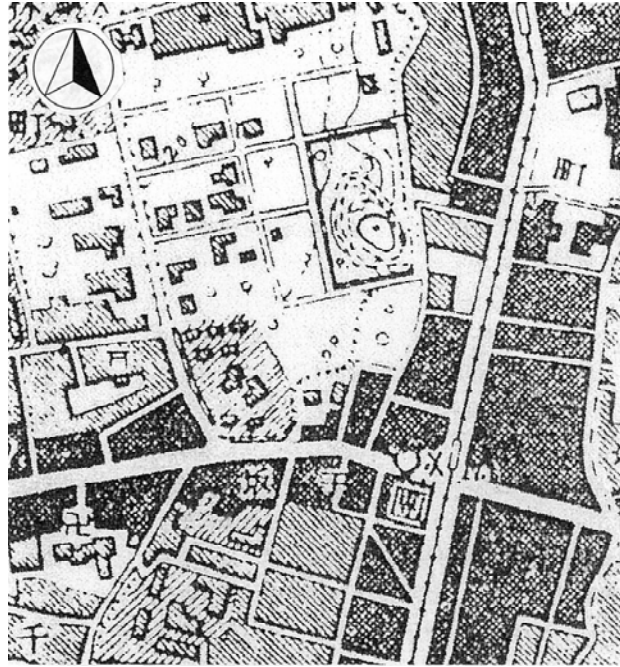


第10図 安政三(1856)年頃



第11図 明治42(1909)年(S=1/20,000)

(『明治前期・昭和前期 東京都市地図1 東京東部』柏書房)



第12図 昭和12(1937)年(S=1/20,000)

(『明治前期・昭和前期 東京都市地図1 東京東部』柏書房)



第13図 根津権現旧境内推定範囲と本調査区域

159号遺構はD 5 グリッドから検出された。規模は確認長約3.00m、幅は最大幅0.90m、最小幅0.75m、確認面からの深さは0.30mを測る。底面は起伏の多くみられ、不整形を呈している。掘り込みの両壁際にはピット列がみられる。ピットは不規則に構築されている。規模は直径0.20m～0.35m、深さ0.15m～0.40mを測る。

本遺構は145号掘立柱建物跡例の西側に隣接して構築されていることから区画溝と考えられる。推定廃絶年代は19世紀前半と推測されている。

【建物跡】

建物跡では版築基礎建物跡、掘立柱建物跡、礎石建物跡などが検出された。

〔版築基礎建物跡〕

143号遺構はE 5 グリッドから検出され、調査区外の北側、西側まで及んでいる。建物は検出形態から二棟とも考えられる。規模は東側棟で東西6.1m（3間2尺）・南北3.6m（2間）を測る。

版築は幅60cm～70cmを呈し、黄褐色ローム土層と礫敷層で構成されている。黄褐色ローム土はわずかに白色味を呈している。版築層は最大厚で2.80mを測り、各層には締りの強弱がみられる。上位層では平均厚約7cmで間隔で段階的に構築されている。

礫敷層は南側・東側で3面、北側で2面、西側で1面が確認された。礫敷層が構築された標高は、各辺で相違がみられる。

礫は直径5cm～30cmの円形、角形を呈し、縄文時代の石器や近世以降の石製品が再利用されていた。石材種には、砂岩、チャート、凝灰岩、閃緑岩などがみられる。

版築は各辺に継ぎ目が確認されることから、各々順次構築されたものと推測される。構築には堰板が用いられた可能性が指摘されている。推定構築年代は19世紀中葉以降と推測されている。

【掘立柱建物跡】

145号遺構はD 5 グリッドから検出された。規模は東西6.60m、南北4.50mを測る。布掘りの規模は、幅0.60m～1.00m、深さ約0.10mを測る。

柱穴は布掘り内に整然と掘り込まれている。形態は平面形が方形や長方形、断面形は主に寸胴形を呈している。規模は一辺約0.60m前後、確認面からの深さは0.50mを測る。芯間距離は、約0.80m～1.00m（約半間）である。南側には幅約0.75mの空間が確認され、出入口と推測されている。推定存立年代は19世紀前半頃と推測されている。

【礎石建物跡】

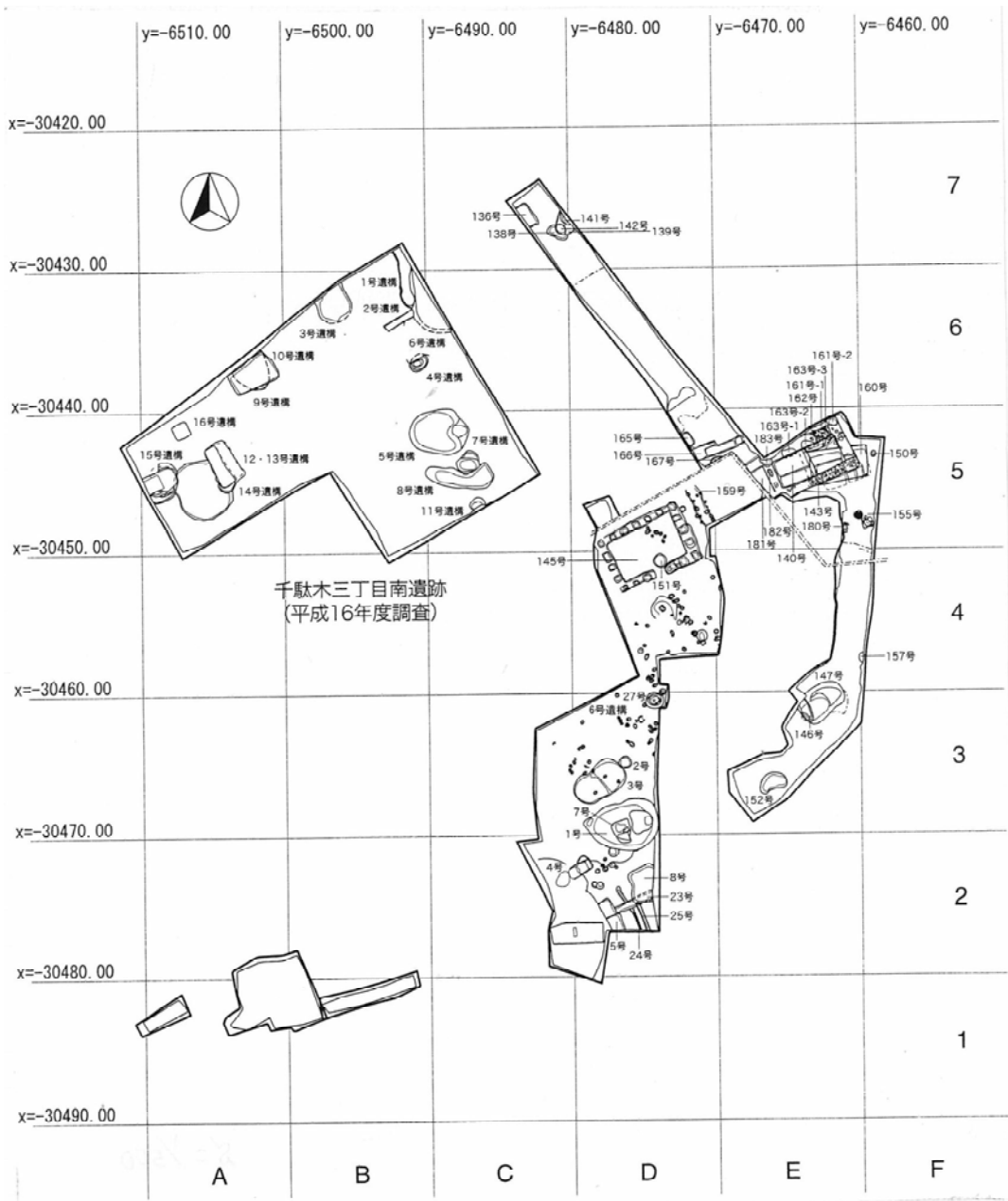
155号・180号遺構はE 5 グリッドから検出された。180号遺構は調査区外に及んでいる。形態は主石の周囲に副石を配している。石質は砂岩で加工痕と調整痕がみられる。芯間距離は1.40mを測る。構築時期は19世紀前半以降と推測されている。

【埋甕】

27号遺構はD 3 グリッドから検出された。甕は常滑系陶器大甕である。甕内の覆土は単層で付着物や相伴遺物などは確認されなかった。性格については、水甕の可能性が指摘され、年代は19世紀初頭～19世紀後葉と推測されている。

【灯火具埋納遺構】

150号遺構はF 5 グリッドから検出された。規模は長軸0.40m、短軸0.30m、確認面からの深さは0.20mを測る。出土遺物は総数7点である。内訳は江戸在地系土器油皿4点、油皿短脚付3点である。



第14図 近世期以降 遺構全体図(S=1/500)

いずれも、いわゆる透明釉が施釉され、使用痕跡はみられなかった。遺構性格は埋納遺構の可能性が指摘されている。推定埋納年代は19世紀中葉から後葉と推測されている。

【胞衣埋納遺構】

6号遺構はD3グリットから検出された。埋納容器には在地系の土器皿が用いられ、いわゆる「合わせ口」の状態を確認された。共伴遺物には上皿の上面に針と墨が置かれていた。下皿の内側は黄色に変色していた。針と墨については、これまでの民俗学的調査から女兒が生まれた際に行われた習俗儀礼と考えられている。推定埋納年代は、18世紀中葉～明治期以前と推測されている。

これらの検出遺構は、各種絵図資料から根津権現旧境内と下駒込村、麟祥院領地に大別される。根津権現旧境内の範囲については、「新編武蔵風土記稿」に記されている「根津権現社蹟」の面積から推定されている(第13図)。この図に遺構全体図(第14図)を照合すると、溝の159号遺構と胞衣埋納遺構の6号遺構の検出位置が推定範囲ラインにほぼ一致していることが伺える。

もし、仮にこのラインが境界とすると、遺構全体図(第14図)に掲載されている145号遺構建物跡、27号遺構埋甕は根津権現旧地内にあたと推測される。

5. 出土遺物・出土遺体

特筆遺物・遺体は大別すると(1)多種多様な植木鉢、(2)園芸に関連すると推測されるもの、(3)生産に関連すると推測されるもの、(4)同一器種・同一文様の揃いもの、(5)ヨーロッパ陶磁器、(6)その他に分けられる。

(1) 植木鉢

植木鉢は総破片数1402点、総重量84,544gを数える。この量は陶磁器、土器、炆器の全体総量の3割強にあたり、その大半が1号遺構から出土している(第1表)。

植木鉢には肥前系・瀬戸・美濃系磁器製品、瀬戸・美濃系灰釉・鉄釉製品、瀬戸・美濃系陶器鉄釉半胴甕(転用品)、生産地不明陶器製品、江戸在地系瓦質土器などごく一般的な製品がみられたが、特異な装飾を施した製品や漆黒釉製品、炆器質製品も多く確認された。

漆黒釉製品は鏝縁桶形と鏝縁桶丸形がみられる。鏝縁桶形は胎土色が灰白色や黄白色を呈している。形態は底部に三足が伴うものと高台に半月状の切り込みが施されるものの2種類がみられる。外面の装飾は共に確認されなかったが、後者の高台内には「○にキ」、一重楕円形枠「帆分亭」印などが押印されている。鏝縁桶丸形は胎土色が灰色を呈し、三足が貼り付けられている。外面には金彩で文様が描かれ、高台内に「□子?坂」印などが押印されている。また、本製品と類似性が高い製品が「セッコクの鉢植」として紹介されている(青木1999)。

炆器質製品は胎土色が灰褐色、胎質は硬質を呈している。口縁部形態は鏝縁桶形を呈し、器壁は4mm程と非常に薄く作られている。内部は底孔に向かって緩やかな傾斜が施され、孔の縁は漆黒釉製品と同様に斜めに削られている。本製品は底径の大きさから5種類に分別されるが、各種の製品は同一寸法で製作されていることから規格製品であったと推測される

(2) 園芸に関連すると推測されるもの

1. (仮称) 札状製品

(仮称)札状製品は、総破片数13点、推定個体数8個体が出土した。胎土、胎質の特徴は瀬戸美濃系

遺構名	計量値	磁器	陶器	炆器	土器	合計
1号遺構	点数	34	246	408	129	817
	重量(g)	3695	33721	9767	4693	51876
2号遺構	点数		3		2	5
	重量(g)		12		52	64
4号遺構	点数	1	9		4	14
	重量(g)	25	382		62	469
8号遺構	点数	8	39		9	56
	重量(g)	238	2392		511	3141
28号遺構	点数				2	2
	重量(g)				12	12
34号遺構	点数				2	2
	重量(g)				5	5
35号遺構	点数		1		4	5
	重量(g)		4		80	84
38号遺構	点数				1	1
	重量(g)				6	6
46号遺構	点数				1	1
	重量(g)				4	4
50号遺構	点数				1	1
	重量(g)				18	18
130号遺構	点数				2	2
	重量(g)				4	4
136号遺構	点数	6	51		23	80
	重量(g)	241	6854		1205	8300
139号遺構	点数		20		13	33
	重量(g)		594		295	889
140号遺構	点数		25		4	29
	重量(g)		4325		78	4403
142号遺構	点数	1	18		8	27
	重量(g)	77	601		197	875
146号遺構	点数		7		6	13
	重量(g)		1569		130	1699
151号遺構	点数				1	1
	重量(g)				20	20
155号遺構	点数	2	15		13	30
	重量(g)	27	434		216	677
160号遺構	点数		22		8	30
	重量(g)		1154		625	1779
161号遺構	点数	1	3			4
	重量(g)	198	422			620
163号遺構	点数		3		5	8
	重量(g)		81		221	302
165号遺構	点数	1			4	5
	重量(g)	22			165	187
166号遺構	点数	3	66		67	136
	重量(g)	188	2857		2403	5448
167号遺構	点数		1			1
	重量(g)		960			960
180号遺構	点数		1		2	3
	重量(g)		104		135	239
A区表土・攪乱	点数	1	35		14	50
	重量(g)	32	1265		268	1565
D区表土・攪乱	点数	1	16		7	24
	重量(g)	84	403		120	607
C7	点数				1	1
	重量(g)				11	11
E4	点数				1	1
	重量(g)				12	12
E5	点数		5		4	9
	重量(g)		107		66	173
D3	点数		6		5	11
	重量(g)		52		43	95

第1表 植木鉢出土遺構・出土地点一覧表

磁器に類似性が高い。先端部は無釉で側面部にコバルト顔料による染付が施されている。表面に使用痕跡がみられないことから未使用品と考えられる。植物名などを記したものだろうか。

2. 飾り石

飾り石には、赤石、瑪瑙、水晶がみられた。なかでも赤石が多量に出土し、石材種はジャスパーと赤チャートを主体としている。

3. 種実遺体

種実遺体では1号遺構から栽培植物のウメ、イネ、オオムギ・コムギ、マメ類、広葉樹のコナラ属コナラ亜属、クスノキ科、サンショウ属、草本のヨウシュヤマゴボウ・ヤマゴボウなどが確認された。このうち、栽培植物とコナラ属コナラ亜属は炭化しているため、遺跡内で貯蔵されていた可能性が指摘されている。また、マメ類は種類の特定には至らなかったが、食用と考えられる。

(3)生産に関連すると推測されるもの

1. 顔料残留製品

顔料は磁器碗に白色、磁器捏鉢にコバルト、生産地不明陶器鉄釉土鍋に白色や別色顔料(赤色?、黄色?)が残留していた。

2. 窯道具?

胎土色は灰褐色を呈し、やや軟質である。胎土中には雲母が大量に包含されている。形態は6種類が確認され、チャツ、ツクなどの窯道具に類似性が認められる。

(4)同一器種・同一文様の揃いもの

中国産磁器景德鎮窯端反皿、香炉、香炉蓋、徳化窯色絵端反形碗、淡路系陶器珉平窯腰張形坏などが出土している。

景德鎮窯端反皿は破片数で37点が確認され、草花文が描かれている。推定個体数は少なくとも6個体が確認され、口径値に相違がみられることから大小の揃い物であったと推測される。高台内には「方形直弧文」銘がみられる。

景德鎮窯香炉は2個体、香炉に伴う蓋が1個体出土している。香炉は体部が面取され、把手が貼り付けられている。体部の文様は人物文と面取部に漢詩が描かれている。漢詩文は各個体間に僅かな字句の違いがみられる。把手は茄子を呈している。高台は別成形で貼り付けられている。高台内には「道光年製」銘がみられる。なお、道光年間は1821年～1850年にあたる。

徳化窯色絵端反形碗は少なくとも10個体以上が出土している。外面には松樹文・竹文が描かれ、高台片資料には高台内に「元」印がみられる。

珉平窯腰張形坏は少なくとも9個体以上が出土し、内面に雲龍文がみられる。器壁は薄い。黄釉は層薄、発色が良好で優品と考えられる。

(5)ヨーロッパ陶磁器

ヨーロッパ陶磁では、碗、皿、坏などが出土している。碗はオランダ、マーストリヒトのペトゥルス・レグート窯碗が2個体出土している。銘は「PARROT」、「PR」が描かれ、「4□」が陰印されるものと「P.R REGOUT」、「MAASTRICHT」が描かれ、「4X」が陰印されるものがみられる。「PARROT」は文様名を表し、1856年から生産されている。

皿は胎質の相違から軟質と硬質に大別される。軟質製品は鏝部分に型打陽刻文がみられた。装飾は色絵で型打陽刻文の上面と内面に草花文が描かれている。硬質製品は平形と折縁形がみられ、口縁部

には金彩で帯線が巡らされている。また、折縁形製品には帯線内に染付で圏線が施され、高台内には銘がみられる。

坏は丸形を呈し、胎土、胎質がオランダ産に類似性が高い。文様は外面の口縁部に「NMNMZMN・・・OT NJK・・・」などのアルファベット、体部に草花文、高台脇に蓮弁文が描かれている。

(5) その他

その他には肥前系磁器鍋島色絵木盃形皿、京焼系陶器湯罐(ポーフラ)、江戸在地系型押陽刻文壽文皿、非在地系火鉢、瀬戸内海地域産焙烙、江戸在地系土人形、金属製品などがみられる。

京焼系陶器湯罐(ポーフラ)が2個体出土している。胎土色は白色を呈し、体部の器壁は2mm弱と薄作りである。把手部には一重楕円形枠「音羽」印と一重隅丸方形枠「乾」印が押印されている。

江戸在地系型押陽刻文壽文皿は胎土色が赤褐色を呈している。器面は丁寧な磨き調整が施され、見込みはいわゆる「内くもり」になっている。また、「壽」には金泥が塗布されている。

非在地系火鉢は胎土色が橙褐色を呈し、外面に丁寧な磨き調整が施されている。高台内には一重楕円形枠「京大阪」印、円形枠「八み」印が押印されている。

瀬戸内海地域産焙烙は大小2種類が確認されている。胎土色は黄白色を呈し、大型製品には耳が2箇所貼付られ、穿孔が2箇所施されている。

江戸在地系土人形は三味線弾きである。胎土色は褐色を呈し、背面に刻印がみられる。

金属製品では鉄製釘が1号遺構からまとめて出土している。出土量は総数1204点、重量3890gである。種類は巻頭釘、皆折釘、折釘、合釘などのいわゆる和釘で巻頭釘が頭部形態が判明した総量の78%を占めている。

この他には「大日本元和年製」銘が刻字、梅花文が陽刻された火箸や建造物の扉や長持ちなど大型の調度類に取り付けられたと推測される鍵が出土している。

6. 居住者の推測

近世期以降の遺構からは多種多様な植木鉢が出土し、調査地点周辺が江戸時代から園芸の盛んな土地であったことから植木屋に関連する遺跡性格ではないかと推測されていた。その後、整理調査において1号遺構から「帆分亭」印が押印された植木鉢が確認された。

「帆分亭」は平野恵氏のご教示により植木屋「森田六三郎」の号であることが明らかになった。森田六三郎は園芸品種が多く、寛永寺法主輪王子宮と懇意であったことで知られている。号は「帆分亭」の他に「植六」も用いられていた。

当該地には文政9(1826)年には居住していたと推測され、主な事績には弘化2(1845)年、菊細工・菊人形の創作(第15図、第16図：豊島区立郷土資料館蔵)、嘉永2(1849)年、本土初の竜眼の結実に成功図、嘉永5(1852)年、浅草寺花屋敷の創設、安政元(1854)年、本土初の荔枝(ライチ)の結実に成功などがあげられる(平野2007、第2表)

なお、詳細については、平野恵2006『十九世紀日本の園芸文化 江戸と東京、植木屋の周辺』思文閣出版、小沢詠美子2006『江戸ッ子と浅草花屋敷』小学館を参照されたい。

平野恵氏は、森田六三郎を精力的な活動内容から植木屋が職人から商人へと変身と遂げた転換点に位置する代表例とし(平野2007)、「農村型植木屋」から「都市型植木屋」への変化と位置づけている(平野2006)。初代六三郎は万延元(1860)年に死去し、家業は二代目・三代目と受け継がれ、団子坂で



第15図 「駒込染井巢鴨菊の見独案内一覽ノ地図」弘化2(1845)年



第16図 「巢鴨染井殿中駒込千駄木根津菊見道あん内」弘化3(1846)年

の生業は明治8(1875)年頃までは続けていたようである。

7. おわりに

今回の調査では、本調査地点が植木屋森田六三郎の居住跡地であったことが明らかになった。森田家の生活様相を園芸関連遺物を除く出土遺物様相から考えていきたい。

供膳具では中国産やヨーロッパ産の碗、皿、珉平窯の坏に揃いものや肥前系磁器鍋島色絵皿などがみられる。なかでも、中国産の景德鎮窯製品では碗の受容が中心であった時期に皿に揃いものがみられることが注目される。徳化窯色絵端反碗は堀内秀樹氏のご教示によると、文様形態が特徴的なことから「注文品あるいは当時、国内で稀少であった文様を現地から選択的に取り寄せた」ものと考えられる。また、煎茶道具では中国産香炉、香炉蓋、京焼湯罐(ポーフラ)、調理具では瀬戸内海地域産焙烙などがみられる。

これらの出土遺物様相からいわゆる「文人趣味」の傾向が伺え、文人仲間の集いの場、いわゆる「サロン」的な場であったと推測される。これは、まさに平野恵氏が指摘される「植木職人」から「植木商人」への転換を出土遺物が傍証しているのではないだろうか。

また、千駄木三丁目南遺跡の(仮称)第1地点では18世紀後葉以降～近代期にかけての土坑、地下室が検出されている。出土遺物には各種陶磁器碗、小坏、徳利、土瓶、挿鉢、焙烙などが主体的に確認されている。推定廃絶年代は、19世紀前半頃と19世紀中頃(1850年代～1860年代)にピークがみられる。出土遺物では皿の出土数が碗に対して少ないが、料理屋の様相が伺える。当該地は「巢鴨染井殿駒込千駄木根津菊見道あん内」(第16図)によると、森田家の隣地に「玉ヤ」が描かれている。「玉ヤ」は玉屋伊兵衛が営んでいた料亭である。

以上、千駄木三丁目南遺跡の様相について、発表者の所見を述べてきたが、本発表が今後の調査、

寛政年間	1789-1801	この頃の景観を記録した『江戸名所図会』の挿図に、団子坂北側の植木屋が描かれない
文政9年	1826	千駄木で植木屋を営んでいたことが『新編武蔵国風土記稿』に記される
文政10年	1827	『草木奇品かがみ』に千駄木の六三郎培養の仏手柑が描かれる
文政12年	1829	『草木錦葉集』に天鷲絨蘭が描かれる
		12月、父太右衛門、浅草で菜飯茶屋を始める
天保元年	1830	4月13日、將軍家斉、浅草寺御成の際、奥山植木屋六三郎植溜を見物する
		8月、『金生樹譜別録』に千駄木六三郎が序文を記し、「道灌斎船松」が図入りで紹介され、竜眼の実に関する記事を載せる
天保9年	1838	9月5日、一枚刷『錦蘭奇品集會』に世話人として帆分亭六三郎の名が載る また帆分亭の名で『にしきかゝみ』に出品する
弘化2年	1845	秋、歌舞伎「暫」、樽に恵比寿、びくや鯛を題材に団子坂にて菊細工・菊人形を出品
弘化3年	1846	秋、菊花壇や菊鉢植を団子坂にて出品
弘化4年	1847	秋、菊花壇や菊鉢植を団子坂にて出品
嘉永元年	1848	1月、『福神草』成立、巢鴨植木屋・斎田弥三郎が群芳園弥三郎の名で自ら図を描き、俳諧も載せる 連名で栽花園長太郎（巢鴨植木屋・内山長太郎）、帆分亭六三郎の名が掲載される
		秋、大菊の鉢植を千駄木六三郎が出品する
嘉永2年	1849	9月、団子坂の園中において、内地では初めて竜眼の実が結実、複数の本草学者に記録される
		10月5日、後の將軍家定御成の折、竜眼の実が御用となる
		秋、菊鉢植を団子坂にて出品
嘉永3年	1850	12月、駒込千駄木町の六三郎、父太右衛門の跡を継ぎ、菜飯茶屋を植木屋に商売替をしたい旨の願書を浅草寺に提出する
嘉永5年	1852	春、浅草奥山に花屋敷を開園
安政元年	1854	秋、団子坂の六三郎の園中において、内地で初めて荔枝の実が結実
安政2年	1855	10月、安政の大地震にて、六三郎隣地の玉屋は無事であると記録される
安政4年	1857	変化朝顔の図譜『都鄙秋興』に駒込千駄木六三郎として出品
		この年序文がある『絵本江戸土産』7編に浅草奥山花屋敷が紹介される
万延元年	1860	閏3月、初代六三郎没すという
文久元年	1861	秋、大菊花壇を団子坂にて出品
文久2年	1862	秋、廿四孝や八大伝の菊人形を団子坂にて出品
		10月、伊藤圭介、池之端「珍物会」に出品したことで、はじめて団子坂の六三郎の名を知る
慶応3年	1867	5月9日・10日開催、入谷長松寺におけるサボテンの品評会に浅草奥山植木屋の六三郎として出品
明治2年	1869	この年か翌年、二代六三郎引退し、三代目が六三郎を襲名するという
明治6年	1873	4月、浅草奥山花屋敷園主・森田六三郎、「新に大牡丹を植る報條」の宣伝文を河竹黙阿弥に依頼 また年月不明「百花細工報告」も同人に依頼する
		10月、根津権現旧地の土地払下の書類が提出される
明治7年	1874	9月2日、下駒込村の六三郎、宮内卿徳大寺實則に荔枝を贈る
明治8年	1875	5月、住居が「下駒込村四十四番地」とある
明治9年	1876	8月、植木屋120名の名が載る「東花植木師高名鏡」に、浅草奥山の森田六三郎として載る
		9月、住居が「下駒込村四十三番地浅井梅次郎方同居」となる
		12月、「薔薇之説」を記す
明治10年	1877	第1回内国勲業博覧会で菊・竜眼・荔枝等を出品して表彰される
明治11年	1878	10月20日、第1回温知会が浅草森田六三郎宅で開かれる。 翌年9月まで全12回のうち六三郎宅を会場にしたのは9回
		12月、浅草奥山の六三郎、東京府勲工場の中に「弄香園」を開園する
明治12年	1879	10月15日から26日まで、浅草森田六三郎方にて、東京横浜の植木屋が補助となって「植物会」を開催する
		この年、浅草六三郎、鉢植窃盗の被害にあう
明治13年	1880	『東京商人録』に「植木商、浅草公園地内24号 森田六三郎」として名前が載る
明治14年	1881	第2回内国勲業博覧会で棕櫚を出品し表彰される
明治15年	1882	10月、浅草花屋敷で朝鮮事件の菊人形を出品
明治17年	1884	10月13日、浅草公園の六三郎、「樹木御買上願書御下渡シ願」を提出する
明治19年	1886	10月、植木屋286名の名が載る「東京有名植木師一覽」に、浅草森田六三郎として載る
		この年、花屋敷の園主が六三郎から山本松之助に移る

第2表 森田六三郎の事績（【註】網掛部：千駄木団子坂における事績） 平野恵氏作成

研究の一助になれば幸いです。

(註)

本発表内容は、発表者が『千駄木三丁目南遺跡』、『千駄木三丁目南遺跡 第2地点』及び整理調査において遺物を実見した際の所見をまとめたものであり、一部、見解の相違から報告書と記載が異なる点があることはご容赦願いたい。

謝辞

発掘調査から報告書刊行に至るまでは、学校法人東洋大学の文化財保護におけるご理解から多大なるご協力を頂いた。発掘調査から報告書作成にあたっては、文京区教育委員会と文京区埋蔵文化財発掘調査指導会議の指導を受けた。実務は合田芳正氏(調査担当者)、新井孝典氏(現場代理人)をはじめ、発掘調査・整理調査に携わった方々のご尽力、ご協力によって実施された。

本発表に際しては、加藤直秀氏(共和開発株式会社代表取締役)、宮田国造氏(共和開発株式会社調査部部长)には江戸遺跡研究会での発表にご理解を頂き、合田芳正氏、平野恵氏(文京区教育委員会ふるさと歴史館)、二瓶秀幸氏(共和開発株式会社調査部)、堀内秀樹氏(東京大学埋蔵文化財調査室)、山本英貴氏(中央大学大学院文学研究科)にご教示を賜った。堀内秀樹氏には発表に至るまでのご便宜、池田悦夫氏(文京区教育委員会教育推進部庶務課文化財調査員)には発表の許可を頂いた。江戸遺跡研究会の世話人の方々には本発表の機会を頂いた。また、例会にて古泉弘氏(東京都教育委員会)、梶原勝氏((有)文化財COM)、小沢詠美子氏(成城大学民俗学研究所)、成瀬晃司氏(東京大学埋蔵文化財調査室)、堀内秀樹氏(東京大学埋蔵文化財調査室)、成田涼子氏(豊島区教育委員会)、水本和美氏(千代田区立四番町歴史民俗資料館)には有益なコメントを頂いた深謝申し上げます。

【引用・参考文献】

青木宏一郎1999「第三章 江戸園芸の特徴P.108」『江戸のガーデニング』平凡社

学校法人東洋大学・共和開発株式会社2007『東京都文京区 千駄木三丁目南遺跡 第2地点』

鈴木啓介・池田悦夫2006「文京区内における江戸遺跡の様相－2004年度・2005年度の調査事例から－」

『江戸遺跡研究会会報 No.105』江戸遺跡研究会

平野恵2007「第3章 文献調査 文献資料に見る団子坂植木屋・森田六三郎の庭」『東京都文京区

千駄木三丁目南遺跡 第2地点』学校法人東洋大学・共和開発株式会社

文京区・文京区教育委員会・共和開発株式会社2005『東京都文京区 千駄木三丁目南遺跡－(仮称)

文京区本郷図書館等建設用地埋蔵文化財調査報告書－』

寛政年間	1789-1801	この頃の景観を記録した『江戸名所図会』の挿図に、団子坂北側の植木屋が描かれていない
文政9年	1826	千駄木で植木屋を営んでいたことが『新編武蔵国風土記』に記される
文政10年	1827	『草木奇品かたがひ』千駄木の六三郎管絃のひし柑が描かれる
文政12年	1829	『江戸木植集』で大輪鉢蘭が描かれる
		12月、父太右衛門、浅草で菜飯茶屋を始める
天保元年	1830	4月13日、將軍家斉、浅草寺御成の際、奥山植木屋六三郎植溜を見物する
		8月、「金土樹譜別載」で千駄木六三郎が序文を記し、「道徳斎の藝松」が図入りで紹介され、竜眼の実に関する記事も載せる
天保9年	1838	9月5日、一枚刷「錦蘭奇品集會」に世話人として帆分亭六三郎の名が載る また帆分亭の名で『にしきかゝみ』に出品する
弘化2年	1843	秋、菊鉢「西」の標に恵比寿、ひくゞ鯛を題材にした版子菊彫り・菊人形を出品
弘化3年	1844	秋、菊花壇を菊鉢を団子坂にて出品
弘化4年	1847	秋、菊花壇を菊鉢を団子坂にて出品
嘉永元年	1848	1月、『福神草』成立、巢鴨植木屋・斎田弥三郎が群芳園弥三郎の名で自ら図を描き、俳諧も載せる連名で栽花園長太郎（巢鴨植木屋・内山長太郎）、帆分亭六三郎の名が掲載される
		秋、大輪の鉢植を千駄木六三郎が出品する
嘉永2年	1849	9月、団子坂の園中において、内地では初めて竜眼の味が結実、夜敷の本草字者が記録される
		10月5日、後鳥羽院定御成の際、竜眼の味が御用となる
		秋、菊鉢植を団子坂にて出品
嘉永3年	1850	12月、駒込千駄木町の六三郎、父太右衛門の跡を継ぎ、菜飯茶屋を植木茶屋に商売替をした旨の願書を浅草寺に提出する
嘉永5年	1852	春、浅草奥山に花屋敷を開園
安政元年	1854	秋、団子坂の六三郎の園中において、内地で初めて、荔枝の味が結実
安政2年	1855	10月、安政の大地震にて、六三郎隣地の玉屋は無事であると記録される
安政4年	1857	菊花朝顔の図譜「菊園秋葉」に駒込千駄木六三郎と記す出品
		この年序文がある『絵本江戸土産』7編に浅草奥山花屋敷が紹介される
万延元年	1860	閏3月、初代六三郎没するという
文久元年	1861	秋、大輪花壇を団子坂にて出品
文久2年	1862	秋、廿四孝や八丈伝の菊人形を団子坂にて出品
		10月、伊藤平介、池之端「珍物会」に出品したことで、はじめて団子坂の六三郎の名を知る
慶応3年	1867	5月9日・10日開催、入谷長松寺におけるサボテンの品評会に浅草奥山植木屋の六三郎として出品
明治2年	1869	この年か翌年、二代六三郎引退し、三代目が六三郎を襲名するという
明治6年	1873	4月、浅草奥山花屋敷園主・森田六三郎、「新に大牡丹を植る報條」の宣伝文を河竹黙阿弥に依頼 また年月不明「百花細工報告」も同人に依頼する
		10月、根津権現旧地の土地払下の書類が提出される
明治7年	1874	9月2日、下駒込村の六三郎、智内彌徳大寺寶則に荔枝を贈る
明治8年	1875	5月、住居が「下駒込村四十四番地」とある
明治9年	1876	8月、植木屋120名の名が載る「東花植木師高名鏡」に、浅草奥山の森田六三郎として載る
		9月、住居が「下駒込村四十二番地浅井梅次郎方同居」となる
		12月、「薔薇之説」を記す
明治10年	1877	第1回内園勸業博覧会で菊・竜眼・荔枝等を出品して表彰される
明治11年	1878	10月20日、第1回温知会が浅草森田六三郎宅で開かれる。 翌年9月まで全12回のうち六三郎宅を会場にしたのは9回
		12月、浅草奥山の六三郎、東京府勤工場の中に「弄香園」を開園する
明治12年	1879	10月15日から26日まで、浅草森田六三郎方にて、東京横浜の植木屋が補助となって「植物会」を開催する
		この年、浅草六三郎、鉢植窃盗の被害にあう
明治13年	1880	『東京商人録』に「植木商、浅草公園地内24号 森田六三郎」として名前が載る
明治14年	1881	第2回内園勸業博覧会で棕櫚を出品し表彰される
明治15年	1882	10月、浅草花屋敷で朝鮮事件の菊人形を出品
明治17年	1884	10月13日、浅草公園の六三郎、「樹木御買上願書御下渡シ願」を提出する
明治19年	1886	10月、植木屋286名の名が載る「東京有名植木師一覽」に、浅草森田六三郎として載る
		この年、花屋敷の園主が六三郎から山本松之助に移る